CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Shokei Gakuin University

保育者養成校における学びの形態

杉山　弘子・荒川由美子・東　　義也・石田　一彦

The Learning Style of Students in College of Early Childhood Education

Hiroko Sugiyama, Yumiko Arakawa, Yoshiya Higashi, Kazuhiko Ishida

保育者養成校における学生の学びの形態および卒業後の学びへの支援のあり方を検討するために、短大卒業時学生へのアンケートを実施した。回答者は118名で、対象学生の91.5％であった。内、54名が保育所、40名が幼稚園に就職が決まっていた。授業での学び合いの経験を勉学上意味のある経験であったか、もっと多く経験したかったと思うかを選択式で尋ねた。その結果､学生が意味のある経験であったとし､もっと多く経験したかったとして選択したのは「他の学生の意見を聞く」と「集団で一つのことに協力して取り組む」の二つであった。また、勉学上サポートし合える集団を求めているかを検討したところ、教員による支援を期待する学生が多かった。卒業後の研修としては、知識・技能や情報を求める記述や、相談・経験交流を望む記述が見られた。

キーワード：保育者養成，学び合い，卒業後研修

＜問　題＞

保育の仕事は、他者との共同によって成り立つ。その営みにおいては、職員間の情報の伝達や子どもと保育についての共通理解を図るための話し合いが大事にされている（杉山他、2006）。保護者との関係においても、連絡を密にすることはもちろんのこと、意見を交わし合いながら連携することが求められる。こうしたコミュニケーション能力や共同する力は、幼少期から高校までの人間関係の中で培われ、保育者として働く中で豊かになっていくものと考えられるが、保育者養成においても重視されなければならない側面と言えよう。

Ｓ短大保育科の場合、学生たちは主に２年次の演習科目で討論や共同活動（学習成果の発表に向けた準備など）を経験する。授業に学生同士の意見の交換や共同活動を位置づけるねらいは、学習への意欲を高め、学び合いを通して個々人の学習を促進することにある。それと同時に、他者とのコミュニケーションや共同への指向性を高め、その方法の習得につながることが期待されている。しかし、学生同士の学び合いを組織する計画的な取り組みや評価方法についての検討はこれからの課題と言わなければならない。

この問題に取り組むにあたっては、学生自身が学生同士の学び合いをどうとらえているかを把握することが重要と考える。学生たちの学び合いにも、討論（ジェローム・レイボウ他、1996）､モデルの観察とモデル経験（田中､2006）､ノートの共有吟味システム（益川､2004）など、いくつかの形態を区別できるが、本研究では、授業場面で自分の意見を述べたり、他の学生の意見を聞いたりする経験、グループで話し合う経験やその内容を発表できるようにまとめる経験、集団で一つのことに協力して取り組む経験を取り上げ、２年間の課程を終えた学生が、これらの経験を意味あるものと受けとめているかどうかをとらえたい。また、勉学を支援するシ

ステムとして学生が求めているものを人間関係に視点をおいて把握したい。教員による支援の充実とともに、クラスやグループ単位で学生同士が支え合うシステムの構築が求められているのではないかと考えるからである。

以上のように、学生同士の学び合いを学生自身がどう評価しているか、サポートし合える集団を求めているかを把握することで、保育者養成校における学生の学びの形態、そして教育のあり方を検討することが本研究の第１の目的である。

次に、卒業生の学びへの支援、すなわちリカレント教育について考えてみたい。幼稚園教諭や保育士としての採用が決まっている学生たちは、卒業時、これからの職業生活をどのように思い描き、養成校に対してどのような支援を期待しているであろうか。本研究では、就職に際しての不安、卒業後の大学とのかかわりおよび研修への期待について尋ねる。卒業時学生が求めている支援の内容および形態から、リカレント教育のあり方を考察することが本研究の第２の目的である。

以上のように、卒業時学生へのアンケートを通して、保育者養成校における学生の学びの形態および卒業後の学びへの支援のあり方を検討することが本研究の目的である。

＜方　法＞

１．調査対象者：保育士および幼稚園教諭二種免許取得可能な保育科２年生
２．調査実施時期：2007 年３月卒業礼拝終了時
３．手続き：対象者が集合している場面で、質問紙を一斉に配布、その場で記入してもらい回収する。後に連絡を取ったりするために記名にしてもよい人には氏名を記入してもらい、無記名希望も可とする。
４．質問内容：次のような内容を尋ねている。
　① 学生自身について（通学方法や卒業後の進路など）
　② 学生生活について（成長感、在学中に力を注いだ活動、専門分野の学習内容と方法など）
　③ 保育者になるにあたって（保育者観、就職に際しての不安の有無とその内容）
　④ 卒業後の大学とのかかわり（大学への期待など）

＜結　果＞

１．回答者

回答者は 118 名で、対象学生の 91.5％であった。

短大入学後の成長感を尋ねる項目（選択式で二つまで選択）では、85％が「保育の専門的知識と技能を身につけることができた」を選択している。また、在学中に特に力を注いだ活動（二つまで選択）では、教育課程に関わる活動（授業、学外実習、演奏会）を選択する学生が 80％を超えている。

調査時点での進路決定状況は、保育所 54 名（45.8％）、幼稚園 40 名（33.9％）、進学９名（7.6％）、一般企業５名（4.2％）、保育所以外の福祉施設１名（0.8％）、その他１名（0.8％）、未決８名（6.8％）である。

２．授業での学び合いの経験

授業での経験として、①自分の意見を述べる、②他の学生の意見を聞く、③グループで話し合う、④グループでの話し合いを発表できるようにまとめる、⑤集団で一つのことに協力して取り組む、の５つをあげ、それぞれについて、「勉学上意味のある経験であったか」、「もっと多く経験したかったと思うか」を選択式で尋ねた。

（１）勉学上意味のある経験であったか

表１は、「勉学上意味のある経験であったか」の問いに対する回答結果を経験内容ごとに示したものである。数字は選択者数である。「そう思う」の選択が最も多いのは「他の学生の意見を聞く」であり、77.1％になっている。ついで「一つのことに協力して取り組む」が73.7％、「自分の意見を述べる」と「グループで話し合う」が57.6％、「グループでの話し合いを発表できるようにまとめる」が43.2％となっている。「どちらかと言えばそう思う」との合計は、いずれも90％を超えている。

表１　勉学上意味のある経験であったか　　単位：人（％）

	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	無答	計
自分の意見を述べる	68（57.6）	41（34.7）	1　（0.8）	2　（1.7）	6　（5.1）	118（100）
他の学生の意見を聞く	91（77.1）	23（19.5）	0	0	4　（3.4）	118（100）
グループで話し合う	68（57.6）	39（33.1）	5　（4.2）	2　（1.7）	4　（3.4）	118（100）
グループでの話し合いを発表できるようにまとめる	51（43.2）	59（50.0）	2　（1.7）	2　（1.7）	4　（3.4）	118（100）
集団で一つのことに協力して取り組む	87（73.7）	27（22.9）	0	0	4　（3.4）	118（100）

（２）もっと多く経験したかったと思うか

表２に、「もっと多く経験したかったと思うか」の問いに対する回答結果を示した。「そう思う」の選択率は、「他の学生の意見を聞く」が55.9％、「一つのことに協力して取り組む」が52.5％、「自分の意見を述べる」が39.8％、「グループで話し合う」が34.7％、「グループでの話し合いを発表できるようにまとめる」が21.2％である。「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」との合計は、「他の学生の意見を聞く」、「一つのことに協力して取り組む」は90％を超えているが、「自分の意見を述べる」、「グループで話し合う」、「グループでの話し合いを発表できるようにまとめる」の３つは、80％台である。これら３つについては、「どちらかと言えばそう思わない」と「そう思わない」の合計が10％を越えている。

表２　もっと多く経験したかったと思うか　　単位：人（％）

	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	無答	計
自分の意見を述べる	47（39.8）	48（40.7）	14（11.9）	4　（3.4）	5　（4.2）	118（100）
他の学生の意見を聞く	66（55.9）	43（36.4）	1　（0.8）	1　（0.8）	7　（5.9）	118（100）
グループで話し合う	41（34.7）	58（49.2）	8　（6.8）	4　（3.4）	7　（5.9）	118（100）
グループでの話し合いを発表できるようにまとめる	25（21.2）	71（60.2）	11（ 9.3）	4　（3.4）	7　（5.9）	118（100）
集団で一つのことに協力して取り組む	62（52.5）	46（39　）	1　（0.8）	2　（1.7）	7　（5.9）	118（100）

（3）経験の意味のとらえ方と意欲

「勉学上意味のある経験であったか」への回答と「もっと多く経験したかったと思うか」への回答の関係を経験内容ごとに示した結果が、表３－１～表３－５である。「勉学上意味のある経験であったか」の問いに「そう思う」を選択した場合、「どちらかというとそう思う」を選択した場合に比べて、「もっと多く経験したかったと思うか」の問いに「そう思う」を選択する比率が高くなっている。また、前者の問いに「どちらかというとそう思う」を選択した場合、後者の問いでも「どちらかというとそう思う」を選択する比率が60％台から80％台となっている。

表３－１　自分の意見を述べる

単位：人（％）

		勉学上意味がある					
		そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	無答	計
もっとしたかった	そう思う	35（51.5）	9　（22）	1（100）	0	2（33.3）	47（39.8）
	どちらかと言えばそう思う	21（30.9）	25　（61）	0	1　（50）	1（16.7）	48（40.7）
	どちらかと言えばそう思わない	8（11.8）	6（14.6）	0	0	0	14（11.9）
	そう思わない	2　（2.9）	1　（2.4）	0	1　（50）	0	4　（3.4）
	無答	2　（2.9）	0	0	0	3　（50）	5　（4.2）
	計	68（100）	41（100）	1（100）	2（100）	6（100）	118（100）

表３－２　他の学生の意見を聞く

単位：人（％）

		勉学上意味がある					
		そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	無答	計
もっとしたかった	そう思う	61　（67）	4（17.4）	0	0	1　（25）	66（55.9）
	どちらかと言えばそう思う	24（26.4）	19（82.6）	0	0	0	43（36.4）
	どちらかと言えばそう思わない	1　（1.1）	0	0	0	0	1　（0.8）
	そう思わない	1　（1.1）	0	0	0	0	1　（0.8）
	無答	4　（4.4）	0	0	0	3　（75）	7　（5.9）
	計	91（100）	23（100）	0	0	4（100）	118（100）

表３－３　グループで話し合う

単位：人（％）

		勉学上意味がある					
		そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	無答	計
もっとしたかった	そう思う	35（51.5）	6（15.4）	0	0	0	41（34.7）
	どちらかと言えばそう思う	29（42.6）	26（66.7）	1　（20）	1　（50）	1　（25）	58（49.2）
	どちらかと言えばそう思わない	2　（2.9）	2　（5.1）	4　（80）	0	0	8　（6.8）
	そう思わない	1　（1.5）	2　（5.1）	0	1　（50）	0	4　（3.4）
	無答	1　（1.5）	3　（7.7）	0	0	3　（75）	7　（5.9）
	計	68（100）	39（100）	5（100）	2（100）	4（100）	118（100）

表３－４　グループでの話し合いを発表できるようにまとめる

単位：人（%）

		勉学上意味がある					
		そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	無答	計
もっとしたかった	そう思う	20（39.2）	5　（8.5）	0	0	0	25（21.2）
	どちらかと言えばそう思う	26　（51）	43（72.9）	0	1　（50）	1　（25）	71（60.2）
	どちらかと言えばそう思わない	3　（5.9）	6（10.2）	2（100）	0	0	11　（9.3）
	そう思わない	1　（2）	2　（3.4）	0	1　（50）	0	4　（3.4）
	無答	1　（2）	3　（5.1）	0	0	3　（75）	7　（5.9）
	計	51（100）	59（100）	2（100）	2（100）	4（100）	118（100）

表３－５　集団で一つのことに協力して取り組む

単位：人（%）

		勉学上意味がある					
		そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	無答	計
もっとしたかった	そう思う	62（71.3）	0	0	0	0	62（52.5）
	どちらかと言えばそう思う	23（26.4）	22（81.5）	0	0	1　（25）	46　（39）
	どちらかと言えばそう思わない	0	1　（3.7）	0	0	0	1　（0.8）
	そう思わない	1　（1.1）	1　（3.7）	0	0	0	2　（1.7）
	無答	1　（1.1）	3（11.1）	0	0	3　（75）	7　（5.9）
	計	87（100）	27（100）	0	0	4（100）	118（100）

３．勉学を支えるシステム

勉学を進める上であったらよかったと思うシステムについて、複数選択式で尋ねた結果を表４に示した。「必要なときに教員に相談できる」が最も多く、58.5%となっている。また、「定期的に教員と面談する」の選択が27.1%である。教員による支援に関わるこれら２つの選択肢を同時に選択した学生は11人で、少なくともどちらかを選択した学生は90人（76.3%）であった。「ホームルームのように定期的にクラスで集まる機会がある」が32.2%、「必要なときに相談できる学習グループがある」が21.2%の選択率になっている。学生同士の支え合いに関わるこれら２つの選択肢を同時に選択した学生は６人で、少なくともどちらかを選択した学生は57人（48.3%）であった。教員による支援に関わる選択肢と学生同士の支え合いに関わる選択肢を同時に選択した学生は、34人（28.8%）であった。

表４　勉学上求められるシステム

単位：人（%）

システム	選択者
必要なときに教員に相談できる	69（58.5）
定期的に教員と面談する	32（27.1）
必要なときに相談できる学習グループがある	25（21.2）
ホームルームのように定期的にクラスで集まる機会がある	38（32.2）
その他	2（　1.7）
無答	3（　2.5）
全体	118（100）

４．保育者として就職する上での不安

保育者として就職するにあたっての不安を選択式で尋ねた。幼稚園への就職が決定している40人の内、23人（57.5％）が「とても不安」を、17人（42.5％）が「少し不安」を選択している。保育所への就職が決定している54人の内、31人（57.4％）が「とても不安」を、22人（40.7％）が「少し不安」を選択している（無答１人）。「あまり不安はない」と「まったく不安はない」を選択した学生はいなかった。

表５　保育者になるにあたって不安な点　　単位：人（％）

不安の内容	幼稚園	保育所	全体
園の教育方針と自分の保育観が合うか	9（22.5）	15（28.3）	24（25.8）
一人ひとりの子どもと信頼関係がきずけるか	16（40.0）	35（66.1）	51（54.8）
子ども集団をまとめられるか	25（62.5）	29（54.7）	54（58.1）
子どもの健康や安全が守れるか	22（55.0）	26（49.1）	48（51.6）
保育の知識や技能が十分であるか	28（70.0）	42（79.2）	70（75.3）
保護者と信頼関係がきずけるか	35（85.7）	42（79.2）	77（82.8）
他の職員と協力してやっていけるか	25（62.5）	39（73.6）	64（68.8）
園の雰囲気になじめるか	6（15.0）	17（32.1）	23（24.7）
社会人としてやっていけるか	17（42.5）	22（41.5）	39（41.9）
その他	1　（2.5）	0	1　（1.1）
全体	40（100）	53（100）	93（100）

不安があると回答した場合、どのような点で不安を感じるかを複数選択式で尋ねた。表５にその結果を示した。全体として最も多かったのは、保護者との関係であり、85.7％となっている。保育の知識や技能の面が75.3％、他の職員との関係が68.8％となっている。続いて、子ども集団をまとめられるかが58.1％、子どもとの信頼関係が54.8％、子どもの健康・安全に関することが51.6％である。社会人としてやっていけるかが、41.9％、園の方針や雰囲気に関することが24.7％になっている。なお、その他を選択した１名の記述内容は、「給料で暮らしていけるか」であった。

５．卒業後の大学とのかかわり

卒業後の大学とのかかわりとして、期待することを複数選択式で尋ねた。表６にその結果を示した。「保育上の悩みを相談する」が72％、「気軽に来校できる」が70.3％、「保育についての情報を得る」が53.4％である。現任研修は35.6％、将来についての相談が26.3％である。同窓生と教員との集まりは16.1％、授業の聴講は9.3％である。

表６　期待する卒業後のかかわり　　単位：人（％）

かかわり	選択者
気軽に来校できる	83（70.3）
現任保育者のための研修に参加する	42（35.6）
保育についての情報を得る	63（53.4）
保育上の悩みを相談する	85（72.0）
授業を聴講する	11（ 9.3）
就職、進学など将来のことを相談する	31（26.3）
同窓生と教員との集まりに参加する	19（16.1）
その他	1（ 0.8）
無答	4（ 3.4）
全体	118（100）

６．卒業後に期待する研修

卒業後、大学にどのような研修を期待するかを自由記述式で尋ねたところ、40人から回答があった。現場での実践に役立つ遊びや知識・技能を学びたいという内容が24人に、実践の交流や保育上の悩みを話し合える内容を求める記述が13人に見られた。

＜考　察＞

１．学生による学びの形態評価

討論のあった授業を想定した学びの形態として、学生が「意味のある経験であった」として選択したのは「他の学生の意見を聞く」と「集団で一つのことに協力して取り組む」という経験であった。この二つの項目で、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」との選択率は双方とも96％を超えている。

また、「もっと多く経験したかったか」という問いには、「意味のある経験」よりは少し選択率が下がるものの、やはり「他の学生の意見を聞く」と「集団で一つのことに協力して取り組む」との二項目の選択率が高かった。

「勉学上意味のある経験であったか」という問いへの回答と「もっと多く経験したかったと思うか」への回答の関係を見ると、「意味のある経験」のところで「そう思う」を選択した場合には、「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合よりも、より明確に「もっと多く経験したかった」を選択している。問われた事柄に対して、「そう思う」と意思表示した学生は、こうした経験を高く評価しているということができる。

こうした結果から、学びの形態として、学生は「他者の意見を聞く」とか「他者と協力して

一つの仕事に取り組む」といったコミュニケーション能力および共同する力の重要性を明確に認識しているといえよう。こうした能力は、保育実践において、職員間でも、子どもとの間でも、また保護者との関係づくりにも欠かすことのできないものである。聞くことについては、中坪ら（1993）も保育志望学生の意識として、「真剣に授業を聴講する」ことが五段階評価中最重要度と受け止められていることを報告している。S短大の学生と同様の受け止めと言えよう。

しかし「自分の意見を述べる」とか「グループで話し合う」あるいは「グループでの話し合いを発表できるようにまとめる」といった自らがより積極的・能動的に行動する経験については「勉学上意味がある経験」としての認識が他の経験よりも低い選択となっている。特に「発表する」という経験は、大勢の他者の前で話すという異なった緊張感を強いられる行動であるだけに、一層「意味のある経験」としても「もっと経験したかったか」という観点からも、選択されなかったものと思われる。

保育実践の場で求められるコミュニケーション能力を培ったといえるには、単に相手の話を聞くだけではなく、「自分の意見を述べて、相手の意見を聞く」という意見交換を含めた相互コミュニケーションが重要となる。こうした側面にも意識を向けられるような授業上の工夫が求められる。

学生たちが相互コミュニケーションの必要性を意識し、発表などの少し緊張感の強い経験も含めながら、こうした学びの形態の意義を積極的に受け止めていくためには、授業場面以外にも勉学を支えるシステムが必要となる。「勉学上求められるシステム」として選択された項目は、「必要なときに教員に相談できる」と「定期的に教員と面談する」とであり、教員とのかかわりを選択している学生の多いことが分かった。現行では随時、教員に相談できるシステムしか実施されていないためにこうした選択結果となったものと推定されるが、教員との信頼関係がつくられていることをうかがわせる結果ともいえる。しかし、現在、実施されていないにもかかわらず、「相談できる学習グループ」「クラスで集まる機会」が30％ほど選択されているのも、そうした教員と学生という関係だけではなく、学生同士もしくは教員以外の相談者といった多面的な人間関係に支えられているという実感をうかがわせるものであろう。学生生活においては、学生同士のかかわりが大きな意味を持っている。友達としてのかかわりが、学習面でもさまざまな学生生活の面でも、支え合える関係となりうることの大切さを認識している結果ともいえるだろう。「学習支援センター」方式等、各大学において、学生の学びを支えるシステムが工夫されている。その内容はさまざまであるが、保育者養成校においても、考慮すべき点であろう。

２．リカレント教育をめぐって

短大卒業時、学生たちは社会人として巣立つ喜びと、果たして保育士としてあるいは幼稚園教諭としての仕事をこなしてゆけるだろうかという不安とを抱えていることが示された。こうした卒業時に感じている不安を、「他者とのかかわり」と「保育者としての専門性」という２つの視点から考察する。

先ず、「他者とのかかわり」について見ると、もっとも高かった不安は「保護者と信頼関係がきずけるか」で、幼稚園就職者と保育所就職者とも高選択率を示した。「他の職員と協力してやっていけるか」と「一人ひとりの子どもとの信頼関係がきずけるか」という項目と比べても高い結果となっている。実習期間中に、学生が保護者と直接かかわることは、職員や子ども

と比べれば少ないと思われる。しかし、先輩保育者から、保護者とのかかわりは大切であると指導され、実際にその苦労を目の当たりにすることで、「その大変さ」を感じ取ってきているのであろう。授業の中で指摘されることも含め、自分自身が「見ていた」立場での苦労が、「実践する」立場で引き受けることとなる事実が、大きな不安として浮かびあがってきているのだろう。こうした不安から、「大学と卒業後にどうかかわりたいか」という問いに対して、「気軽に来校できる」や「保育上の悩みを相談する」場としてのかかわりを求めているのだろう。リカレント教育のあり方の一つとして、こうした不安がどのように継続するのかあるいは軽減して行くのか、その対応の仕方はどのようなものであったのか、などを考えて行く必要がある。

次に、「保育者としての専門性」という視点からの不安を見てみる。「保育の知識や技能が十分であるか」という点については、幼稚園就職者・保育所就職者ともに高い不安感を表明している。「子ども集団をまとめられるか」「子どもの健康や安全が守られるか」という点と比べても、「保育の知識や技能が十分であるか」という点での不安が大きい。短大生活での成長感を尋ねられたときには「保育の専門的知識と技能を身につけることができた」ととらえていたにもかかわらず、社会人として旅立つにあたり、本当に「十分であるか」という問いに接して、期待とともに不安が交錯する短大卒業生の胸中がうきぼりにされたとも言える。こうした不安があることから、大学とのかかわりとして、安心した人間関係に加え、「保育についての情報を得る」「現任保育者のための研修に参加する」などが選択されているのだろう。リカレント教育の第二の視点として、卒業生の悩みや不安に具体的に応える場の設定が求められる。

卒業後に期待する研修として自由記述で得られた回答には、こうした不安をもととして1）知識・技能や情報を求める声と、2）相談・経験交流とを求める声とが見られた。前者としては、「実践で使えるあそび、など」「子どもの健康管理について」「保育現場に生かせる研修」「障害児についてなど新しい保育に関する知識」などが書かれてあった。また、後者としては、「実際の職場でのことをみんなで話し、先生方に相談にのっていただきたい」「保育実践の話し合いの場」といった、保育者同士の経験交流や教員との相談を求める声や、「保育上の悩み相談」を明確に研修テーマとして掲げているものがあった。

いずれも、卒業という時点における不安を反映したものではあるが、こうした要望を取り上げながら、卒業生との個別のかかわりを大切にして行くことが、保育者養成校に課せられた課題とも言える。さらには、そうしたリカレント研修の実際を、在学生にも知らせて行くことで、学生時代と保育実践者としての時間とのつながりも明確になり、保育者養成カリキュラムの充実にもつながっていくものと考えられる。

「やりがいを感じつつ仕事を継続してゆく保育者」（神田・大村、1991）として育っていってほしいと願うとき、専門的な知識の習得ともに、人間関係づくりの能力を育むような学びの形態および卒業後の学びへの支援のあり方を今後とも検討することは、保育者養成校として意味のある課題となる。

＜文　献＞

神田英雄・大村恵子　1991　保育者における保育観・やりがい感の成長と大学教育－予備的研究　名古屋短期大学研究紀要第29号　p. 71 - 93

ジェローム・レイボウ，ミッシェル・チャーネス，ジョハンナ・キッパーマン，スーザン・ベイシル著　丸野俊一・

安永悟訳　1996　討論で学習を深めるには　LTD話し合い学習法　ナカニシヤ出版
杉山弘子・鈴木純子・菊地真知子・斎藤永子　2006　保育所での会議・話し合いの持ち方と充実度　保育の研究21　34-44
田中幸代　2006　同学年モデルの観察およびモデルとなることが，大学生の保育実技の「準備」・「自己効力」に及ぼす効果　教育心理学研究54　408-419
中坪史典　1993　保育志望学生の学生生活実態とその意識改革の支援に関する研究　保母養成研究第11号　p.15-23
益川弘如　2004　ノート共有吟味システムReCoNoteを利用した大学生のための知識構成型協調学習活動支援　教育心理学研究52　331-343

付　記

本研究は、筆者ら4名で行った保育者養成カリキュラムに関するアンケート調査をもとに「保育者養成校における学びの形態」に関して報告したものである。